The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	汪中の荀子説
Author(s)	横久保, 義洋
Citation	中国研究集刊. 1995, 16, p. 82-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

汪中の荀子説

横久保　義　洋

はじめに

汪中（乾隆九年－乾隆五十九年）字は容甫、揚州・江都の人である。彼は、一諸生としてその生涯を過ごし、兼ねて貧と病とに悩まされ、ついには五十一歳を一期として杭州において客死する。ただ汪中が他の同様に不遇な多くの人々と異なり、生前においては洪亮吉・孫星衍・劉台拱などを含む知人や友人にその学才を賞美され、死後にあっても名声は絶えることなく、とりわけその主著『述学』は「その文章の謹厳と内容の弘深さとによって、学者文人の間に多くの愛読者をもったから、すくなからぬ影響を及ぼした」（湯浅幸孫『中国倫理思想の研究』第二部「中国倫理思想の諸問題」、同朋舎、昭和五十六年）のであった。

例えば包世臣は、かねてより汪中に関心を示していたが、汪氏が世を去ってから十一年経った嘉慶十年乙丑、揚州に遊び、畢貴生（汪中の甥・女婿）と同室したところ、三夜続けて夢に汪中が現れ、その遺著の整理を嘱されたという（『藝舟双楫』所収「書述学六巻後」）。また、道光年間には、金山の精法楼に神主を安置され、杭州の詁経精舎においても許慎、鄭玄らの先賢に合祀されている（『容甫遺詩』附録）。

このように、汪中に対する高い評価は在世時から現代に至るまでの長きに亘り公認されていたが、一方、逆にその性格や学問上の立場が災いし、多くの敵や批判者を作るに至った。例えば、方東樹は『漢学商兌』『書林揚觶』において漢学を非難し、宋学を擁護する立場から、汪氏が朱子を詆毀していることを咎めてい

る。また、章学誠は『文史通義』の中で彼を「聡明には餘り有るも、識は足らざる者」と断じ、『述学』中の所説に一々反駁している（胡適『中国近三百年学術史』第九章「章実斎」、柴徳賽『史学叢考』「章実斎与汪容甫」、羅炳綿『清代学術論集』「汪容甫思想略論」においては、章・汪の二人の事跡・学風の異同について論じている）。

従来、乾嘉時代の学術思想史の上において、汪中の占める位置の重要性についてはよく指摘されてきた。しかしその多くは王念孫と共に揚州学派の創始者として、また荀子や墨子などの先秦諸子の再評価を行った人物として、概説的に扱うだけのものであり、より深く掘り下げて書かれた専論はあまり多くはない。そこで本稿では汪中の荀子論について、彼の「荀卿子通論」（『述学』所収）などに依拠しつつ、その持つ意味を明らかにしてみたい。

第一章　荀子の「伝経の功」

梁啓超はその著『清代学術概論』の中で、清儒が古書の校勘の面から出発し、更に進んで荀子や墨子など先秦諸子に対する関心が高まり、考証学的方面からの研究が盛んになっていったことを述べている。そしてその好例として汪中の「荀卿子通論」を取り上げ、同じく汪中の「墨子序」「墨子後序」や孫星衍の「墨子序」と共に「我が輩今日之を読むに、誠に甚だ平易なるを覚ゆ。然れども当日に在りては、固より人の未だ発せざる所を発し、且つ人の敢へて言はざる所を言ふ也」と、彼が清朝人による本格的な荀子研究の嚆矢となったことを高く評価している。しかし梁氏はその「未だ発せざる所」「敢へて言はざる所」とは何であるのか、具体的な言及はしていない。

汪中の荀子・墨子研究については、右に引用した一文の他にもその重要性はたびたび指摘されているにもかかわらず、専論としてまとめられたものは決して多くはない。墨子に関しては本稿の主題からはずれるのでさし当たっては検討しないとしても、その荀子観を扱ったものとしては彼個人、もしくはこの時代の学術全般を取り上げた中に叙述が見られるものがほとんど

である。しかもそれらの中には単に汪氏の荀子に対する見方だけではなく、孟子との比較において論じ、更には当時の漢学と宋学との争いに結び付けようとする傾向を持つものさえ存在する。例えば、趙航『揚州学派新論』第三章（江蘇文藝出版社、一九九二年）では汪氏が「荀卿子通論」の中で「世、当に孔・荀を以て並挙すべくして、応に孔・孟を以て並称すべからず」ということを証明したとしている。

また、稲葉誠一「汪中伝稿」（『東方学』第九輯、昭和二十九年）においても、「（汪）中の企図する所は、孟軻以来二千年の学風を一変せんと欲するもの」「然らば則ち、彼の先づ従事すべきは、かの後王の説を有せる荀卿の為の如くなるべきか」として、同様の議論を述べている。

『明清実学思潮史』（斉魯書社、一九八九年）所収、第五十七章・魏宗万「汪中的〝用世之学〟」に至っては、汪中の荀学研究とその「独創的見解」である道統説の改変との関連性を指摘して次のように言う。すなわち、彼は「更に荀学を持ち上げて孔子学説の真伝者とし」、「大胆に〔堯舜から文武周公を経て孔孟に至るとする〕この〔唐宋以来の〕神聖な道統説を修正」することによって、「正統派理学への有力な攻撃」となしたのである、と。

これらの記述によれば、汪中が荀子を再評価したのは孟子や宋学を否定するための対立者としての役割を彼に与えたことを理由としているかのような印象を受ける。ところが彼の荀子観を集中して載せている「荀卿子通論」（『述学』補遺所収）を精細に読了したが、孟子について一切の批判がないばかりではなく、宋学に対しても直接の言及はなされてはいないのである。そこから考えてみるに、これらの論文（大部分は「荀卿子通論」しか論拠に挙げていない）において主張されている結論はいささか性急にすぎると認めざるを得ない。まして自己の憶測をあたかも汪中が実際に書き残していることのように述べている諸論考については言うまでもない。

「荀卿子通論」において実際に主題となっているのは、その本文冒頭と末尾とに「荀卿の学は孔子に出でて尤も諸経に功有り」とあるように、『経典釈文序録』や（『荀子』本書をも含む）秦漢の古書を用いて荀子

が毛詩・魯詩・韓詩・左氏春秋・穀梁春秋・曲台礼の伝授を果たし、更には公羊春秋や易にも関わりがあったということの論証、すなわち荀子の「伝経の功」の再評価を試みていることである。そして何よりも注目すべきことは、『荀子』書中の他の様々な内容、殊に性悪説や天観など、いわば哲学的な事柄についてはまったく言及されてはいない点である。

「荀卿子通論」は汪中の荀子論の精華となっているものであるが、それでは彼の著述の他の箇所において荀子についてどのような取り扱いがなされているのであろうか。最初に挙げなければならぬのは「荀卿子年表」（『述学』所収）である。

「荀卿子年表」では、荀子の生卒年や事跡に関しての論議について、彼自身の判断が下されている。もっともその性質上、荀子の哲学面には触れられてはいない。

なお、荀子の生卒年については『史記』の記述に端を発し、長年にわたりさまざまな意見が出されてきたが、汪中自身の考えを紹介してみよう。

「荀卿子通論」には荀子の出生年に関する記述はない。「荀卿子年表」にも生卒年は明示されていないが、ただ『史記』の記述にしたがえば少なくとも百三十歳以上であろうとし、また『塩鉄論』毀学篇を引き秦の天下統一後、李斯が丞相になった時まで荀子が生存していたとして、その年は「春申君の死を距つること十八年、斉の湣王の死を距つること六十四年、是の時、荀卿蓋し百餘歳ならん」と考証しているのである。かつその後の部分でも「漢の張蒼・唐の曹憲は皆百有餘歳なり。何ぞ独り卿においてや之を疑はん」とあるように、その長命を疑う必要のないことを説いている。

なお、同じ汪中の著である『旧学蓄疑』にも荀子の生卒年について考証した一文がある。そこでは「荀卿子年表」の「荀子遊斉時五十歳」説とは異なり「十五歳」説を主張したりなどしているが、それにもかかわらずここの試算でも最低百二十四歳以上の長寿を保ったことになる。いずれにせよ、荀子が何歳まで生きたかということは俄かには定め難いが、彼がこのように主張している以上、しばらく妄聴する他ない。

『述学』中の荀子の専論はこの「荀卿子通論」と「荀卿子年表」との二篇のみであるが、他の主題で書かれ

た文章の中にも荀子に言及しているものがある。一つは、「墨子序」である。ここでは、儒家において墨子を批判した者には孟子と荀子との二人がいることを指摘した後、王者の盛徳をなすために礼楽を唱導する荀子と衰世の弊害を救うために薄葬や非楽を説く墨子とは一見相反しているように見えるが、実はその意は合致する、「相反して相成る」のだと述べている。

もう一つは、「賈誼新書序」である。ここでは『左氏伝』の伝授において賈誼が荀子の再伝弟子に当たり、従って礼に長じていると指摘して次のように言う。

其の陳ぶる所の諸侯王を立つる制度、太子を教へ大臣を敬するは、皆先王の成法、周公の旧典、仲尼の志にして、蓋し春秋の経世の学　焉に在り。是の故に備物（国に伝わる重器）と典策とは国の興に立つる所にして、君挙ぐれば必ず書し以て後世に詔ぐ。春秋は周礼を秉りて其の変を謹む者也。吾、荀子・賈子の礼を言ふに於けるや益々信ず。

ここでも賈誼とともに荀子の礼学の淵源のあることが主張されている。

汪中には『述学』の他、没後の編纂にかかるものを含め、多くの著作がある。その内、現存する『大戴礼記正誤』『経義知新記』『旧学蓄疑』等には荀子に触れている箇所がかなり存在する。その多くは『荀子』書の字句の訓詁や、あるいは他書との校合に用いているものであるが、その中でも荀子と経書との関連を示したものが目立つ。まず、『大戴礼記正誤』では『大戴礼記』中の三篇（「哀公問」「礼三本」「勧学」）は、『荀子』の「哀公」、「礼論」、それに「勧学」「宥坐」の諸篇とそれぞれ内容が一致していることが指摘されている。

また『旧学蓄疑』では『荀子』の各篇において『詩経』『書経』や曾子・孔子の言を引用した部分が何箇所あるか、統計が採られ、その数量が示されている。曾子についてはその文章を引き、併せて同文が『大戴礼』にも見えることを指摘しているが、『詩』『書』や孔子に対しては単に『荀子』各篇中の引用回数を列挙しているだけである。

このように、「荀卿子通論」を初めとする汪中の遺文から判断する限り、彼の荀子に対する関心はその経学などの文献学的な面にあり、性悪説や天観等の比重

は相対的に小さい、と言うことができよう。

なお、大谷敏夫氏の『清代政治思想史研究』（汲古書院、一九九一年）所収「揚州・常州の学術と社会」（小野和子編『明清時代の政治と社会』昭和五十八年に収められている同氏の「揚州・常州学術考」とほぼ同文）では先に触れた「伝経の功」のため、「汪中は荀子を孔子の学の真の継承者であるとみなしていたのである」と指摘した後、次のように叙述を進めている。

〔汪中による〕荀子の性悪説に対するとらえ方も、宋儒以後の批判的見解とは異なったものともなっている。『荀子』「正名篇」に、「心慮りて能く之が動を為す。之を偽と謂う。慮積み能く習いて而る後に成る。之を偽と謂う」とあるのを受けて、汪中は『旧学蓄疑』に、「然らば則ち荀子、性を以て偽となすは、固より此の如きのみ。夫れ偽と為は一なり」とのべ、偽の意味を真偽の義でなく人為の義であると考え、それこそ荀子のとく性の本質であるというのである。このように汪中は偽を為の義に解釈し、思慮と学習によって本来の性を獲得しうるというところに到達した。

大谷氏は『旧学蓄疑』のこの箇所を、荀子の哲学的な事柄について述べられたものと解しているようである。しかし『旧学蓄疑』の原文ではその直後に「而して慈溪の黄氏は曲さに之が辞を為す。正に労無き耳」とある。ここでいう「慈溪の黄氏」の説とは、恐らく宋の黄震による〈荀子が人性は「偽」であるとしているが、実は古は「偽」とは「人為」のことを指して言っているのであり、今使われている「詐欺」の意ではない〉とする荀子弁護論（『黄氏日鈔』巻五十五）のことである。とすれば、汪中の文の重心はこの「慈溪の黄氏」の考証方法自体の批評に対するものであって、大谷氏の述べているような『荀子』自体の思想的内容に深く立ち入ったものではないと思われる。

この黄震の説などもそうなのであるが、唐宋以降、汪中の時代に至るまでの間に、さまざまな人により無数の荀子論が行われて来た。しかしそれらは生卒年についての考証でなければ、「性悪説」などの非難、もしくはその弁護がほとんどを占めていた。無論、「荀子が孔子の道を伝えている」という記載をしているもの、もしくは荀子が礼に詳しかったことを述べている

ものも少なくはないが、「伝経の功」ということを明確に指摘し、その面から荀子の儒学史上における位置を論じているのは管見では汪中が初めてである。

もっともそれまで誰もこのことに気が付かなかったとは到底思えず、暗黙の内に共通認識となっていた可能性もあるのであるが、そのことを改めて再主張したところに汪氏の着眼の独自性を見る。そして、初めに挙げた梁啓超の汪中に対する評価も恐らくここのところにおいて関わってくるのであろう。

そして、汪氏の荀子論の中で特に興味深いのは、彼が道と経書とを、ほとんど同一化しているように見受けられることである。その端的なものとして、次の「荀卿子通論」の一節をあげることができる。

蓋し七十子の徒既に歿してより、漢の諸儒未だ興らざる〔までの間〕、中ごろ戦国暴秦の乱を更るも、六藝の伝の頼りて以て絶えざる者は、荀卿也。周公之を作り、孔子之を述べ、荀卿子之を伝ふ。其の揆は一也。

汪中自身は何も言っていないが、実はこの文は明らかに唐の楊倞の「荀子（注）序」にある「蓋し周公之を制作し、仲尼之を祖述し、荀孟之に賛成す。王道を膠固にする所以、至深至備にして、春秋の四夷交々侵し、戦国の三綱弛絶すると雖も、斯道竟に絶えざるなり」を踏んでいるものと思われる。ただし楊倞の場合は「道」の継承者という観点からの記述であるのに対し、汪氏はそれを専ら経典の伝授の面から見るように言い換えているのである。

第二章　孟子の評価

前章において、一部の論文では汪中が孟子の価値を低く評価し、その正統性すら否定しているなどと主張されていることについて、すでに述べたように「荀卿子通論」の中にはそれを窺わせる記述はなく、不十分であると指摘した。そこでここではまずその説の当否を確かめるために、今日に残された彼の文章の中の孟子に関連したものを検討してみることにする。

『旧学蓄疑』には、『韓非子』顯学篇から次の一節が引かれている。

孔子の死するより子張の儒有り、子思の儒有り、顔氏の儒有り、孟氏の儒有り、漆雕氏の儒有り、仲良氏の儒有り、孫氏の儒有り、楽正氏の儒有り。

そしてこの後に汪中は「此に据りて知る、七十子の後、孔子の学を伝ふる者は孫卿（荀子）也」と案語を付している。何故この零細な記載からこれだけの結論に到達しえたのか、いささか解しがたいところもある。あるいは、この語はこの『韓非子』の一節のみならず、『旧学蓄疑』の中のすべての荀子関係の条を総括して論じているのかも知れないが、よくわからない。いずれにせよ、確かにこれを見た限りでは汪中が荀子のみを孔門の正統とし、孟子を傍流として退けているとみなしていると言うのは間違ってはいない。

ところが、先には言及しなかったが、「荀卿子通論」の荀子の師承を論じている箇所においては次のように述べている。

『史記』に載するに、孟子は業を子思の門人に受く、と。荀卿においては則ち未だ詳らかならず。今其の書を考ふるに、（中略）荀卿の学、実に子夏と仲弓とに出づるを知る。

勿論この文の主眼は孟子の師承がはっきりしているのに反し、荀子のそれが未詳なのを明らかにするというところにあるのだが、ただここで孟子が子思の学を受け継ぐ者であることをわざわざ再確認しているからには、荀子を孟子と同じ位置にまで引き上げようとしていたとは言えても、少なくとも孟子を全面的に否定しようとまでは考えていなかったのではあるまいか。

次に『経義知新記』では、孟子と荀子とが共に「卿」と呼ばれ、大夫の位にあったことが考証されている。ここでも孟・荀を並べて論じている。

また、前章においてすでに挙げた「墨子序」でも「儒の墨子を黜くる者は、孟氏・荀氏なり」として、汪中は孟・荀の二者を併記している。もっともここでは墨子と荀子とを比較して、「相反して相成る」などと、その差異は表面的なものに過ぎぬのだと極力両者の調停を図っており、一方、「兼愛」説への孟子の非難は、その「曲解」から発した不当なものとしている。したがって賀広如「乾嘉墨学蠡測」（『中国文学研究』第六期、民国八十一年）がすでに指摘している通り、孟・荀の墨子批判への態度には自ずから違いが見られるこ

とは否めない。

しかし、ここの記述だけで単純に汪中が孟子を退けていると解すべきではないだろう。何故なら、孟・荀の墨子批判が実際にどのようなものであったかは置くとしても、彼がここで説いているのは二者に対する好悪の差ではあっても、孟子の儒教内における位置を否定するようなものでは全くないからである。

そもそも歴代にわたって、荀子を肯定的に評価する者には、葉徳輝のように孟子を抑え経書の列から除いて諸子として扱うべきであると主張する者もあるが（『郘園学行記』）、おおむね孟子をも否定せず、「孟荀兼採」の立場を取っている者が多い（葉徳輝の場合も孟・荀をともに諸子として同列に並べているのだから、決して孟子を全く排除しているわけではない）。大谷氏前掲論文においてはこの事実を戴震、焦循、凌廷堪、銭大昕、盧文弨等について見ているが、ただ氏は汪中の孟子論については何も言ってはいない。また清朝中葉以降の例しか挙げていないので、この時代になって始めてこの種の意見が出現したかのように受け取られるおそれもある。ところがこの傾向は夙に唐代から荀子に対して肯定・擁護の立場を採る人々の間ではごく普通に見られるものである。

孟・荀を併称するのは『史記』や劉向『別録』に始まるが、この頃には単に両者をその性論の相違から対立的にとらえるだけで、その調停を試みようとする考え方はまだない。唐代になると、孟・荀を総合的にとらえようとする動きがでてくるようになる。例えば、皇甫湜「荀孟言性論」（『皇甫持正文集』）には両者の性説は本から末を推すか、あるいは葉から根に流れるかの方法の違いに過ぎぬのであり、本質は同じだとする認識が示されている。類似した議論は宋以降にも、殊に性悪説に対する弁護をしているものには多く提示されている。ただ清朝中期以後ほどこのような意見が集中して出て来たことはかつてなく、その意味において大谷氏が当時の思想史的流れとしての「荀学復興」「孟荀兼採」を指摘したのは正当である。そして、汪中もまた独りこの流れの外にいると見るべきではないが、彼が他の荀学者等と異なるのは、前述したように、哲学的方面からではなく、経書の伝承の面から荀子の再評価を行った点にある。

ところで、汪中は『経典釈文序録』等を前提として荀子の「伝経の功」を導き出したのだが、これについて本田成之『荀子経説』（『支那学』一巻六号、大正十年）には次のようにある。

容甫は尤も能く荀子の価値を発揮した者と謂ふべきである。但経典、序録を始めとして其の根拠とした者は甚だ疑はしい。例へば毛詩、穀梁春秋ともに子夏から伝へたとあるが荀子の非十二子の中に「正其衣冠、斉其顔色、嗛然而終日不言、是子夏氏之賤儒也」とある。いくら口の悪い荀子でも己の学祖を斯く罵倒する筈はないから子夏から伝へたと云ふのは事実ではなからう。（魏源詩古微皮錫瑞経学通論）しかし兎に角荀子は戦国末秦初の大儒であつたから漢初の諸学者が直接間接に影響を受けたことは魏文侯の当時の子夏と同類の関係であつたに違ひない。したがつて経書の伝来が何れも子夏、荀子の手を経たことになつて居るのも無理はないが、悉くは信用することの出来ぬのも疑ひない事実である。

本田氏が述べるように、汪中の議論がその拠るところの資料に無批判に頼っていることは明らかである。しかしここで重要なことは、彼の説の真偽よりも、彼がなぜ敢えてかような主張をなしたか、ということである。つまり、彼がなぜ荀子を持ち上げる必要を感じていたかであるが、この点から彼の礼学との関わりが考えられないであろうか。

なお、これまで彼は宋学に反対したと説かれてきた。例えば、江藩『漢学師承記』には「〔汪中は〕宋儒の性命の学を喜ばず。朱子の外、其の名を挙ぐる者有れば、必ず之を痛詆す」という記載がある。江藩は直接彼を知っていたのであるから、その発言は何らかの根拠があるものと思われる。事実、『述学』に収められている「女子許嫁而婿死従死及守志議」「大学平義」「講学釈義」等の諸篇には朱子学のさまざまな側面に対して批判が加えられており、そのことは認めざるを得ない。しかし、この点についてもなお検討を要すべき餘地がある。

それは、汪中の晩年の頃より顕著となってきた「漢宋兼採」の思潮の存在である。例えば、彼の摯友であった劉台拱や子の汪喜孫などもそのような傾向を有し

ていたことはすでに指摘されている（稲葉誠一「汪中伝稿」、藤塚鄰『清朝文化東伝の研究』第十二章「汪孟慈と阮堂」）が、この問題についての汪中自身の観点は『述学』等には言及されていない。ところが、汪喜孫は、さきに挙げたようにその父が宋学者を敵視したと伝えられていることに対して、「もし伝えられていることが事実ならば、どうして宋学を奉じている劉端臨（台拱）と親交を結ぶことがあろうか」とし、そのような事実はなかったことを証明しようとしているのである（『孤児編』巻三「校経堂集凌仲子撰先君墓銘正誤」）。このような反論が現れることは、汪中の宋学に対する態度が必ずしも通説のごとく単純なものではなかったことを示している。

汪氏の孟・荀論、礼学、そしてこの漢宋学に対する立場などは、別の新しい視点（例えば、経世学。これについては趙航、魏宗万の前掲論文において集中して扱われているが、やや概説的である）から詳しく見てみる必要があるかも知れない。このことは今後の探求の課題としたい。

執筆者紹介（執筆順）

川原秀城　東京大学教授
趙　宗正　山東省社会科学院儒学研究所所長
路　徳彬
神林裕子　大阪大学助手
藤居岳人　阿南工業高等専門学校専任講師
矢羽野隆男　四天王寺国際仏教大学専任講師
横久保義洋　大阪大学大学院学生